
光ある絶望

Drealist

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光ある絶望

【Nコード】

N2119C

【作者名】

Drealist

【あらすじ】

あの人のために、彼女のために僕は自殺を選ぶ。

僕は車から降りた。

目の前をかなりのスピードで車が通過していく。

思い出したくなくても、目に浮かぶ風景。

すべてが同じとは言いがたいが、

空気、アスファルトの色、飛んで走っていく車……

重なるものはいくらでもあった。

かつて僕は、似たような場所で祈っていた

普通の、変哲もない道路。

ここで僕は命を落としかけ、そして助けられた。

お母さんに連れられ、公園のすぐ脇の十字路に立っていた。

つい一昨日。

サッカーをしていた。

タカシの蹴ったボールが、ワケのわからない方向に飛んでいった。

ボクはそれを取りに走った。

ボールをつかむより先に、クラクションが大きく鳴った。

驚いて目をつむった。

……そして気づいたら、男の人がはねられていた。

お母さんの言うところでは、ボクはその男の人に助けられたらしい。

投げ飛ばされた拍子に、側溝まで飛ばされ大きく腕を切った。

だから今、右腕には包帯が巻かれている。

ボクは手を合わせた。静かに祈った。

風を切る音に、目を開ける。

僕は、罪悪感を心に浮かべていた。

その感覚はあの頃からほとんど変わることなく、ずっと居座り続けている。

子供だったはずの僕が祈ったのは、

たしかに彼 助けてくれた男の人 の無事であることは確かだった。

けれどそれは、命の恩人への『助かってほしい』という願いではなかった。

『罪悪感を拭きたい』という逃避からだった。

むしろ僕は、事故のすべてを忘れ去りたかった。

黒い想い出は、一つたりともほしくはなかった。

その、罰、とでもいうのだろうか。

また僕は助かった。

最愛の妻、という人物を犠牲にして。

運命というものがあるのなら、僕にはそれを変えてみせるつもりだった。

僕が助かることで誰かが犠牲になるのなら、

僕が犠牲になることで誰かが助かるだろう。

そして確実に失われれば、助かる可能性も高まる気がするんだ。

彼女の命がある間に。

僕は一步、踏み出した。

ビュッ、と切る音に足がすくむ。

地面を蹴る。

僕一つの命では、彼女一つの命しか救えないだろうか。

それとも、こんな命では足りないだろうか。

できれば彼も、助けてほしい。

善意だけで僕を助けてくれた彼を。

釣り合わないことは、承知の上で。

そのぶつかる衝撃は、涙を散らせてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119c/>

光ある絶望

2010年10月9日05時55分発行